

私は、前段の如く、これらを有力なる一機關に統制せしめねばならないとの意見を抱く者である、それ故に、以上の如き成行に、重大の疑問を抱き不安を感じる者である、この際、市の當局者にも、政府の當局者にも、民間の企業者にも、東京市の交通機關如何との問題を東京市の前途のため、民衆の福祉のため、改めて考慮して貰ひたいと切望に堪へない。

— 昭和・六・二一・七稿 —

道路・郵政及新聞の三位一體

長谷川久一

當面の強敵カルタゴを屠り、地中海に面する一切の領土を網羅し、北方は中歐より英佛海峽の彼方に迄勢力を及ぼせる大羅馬帝國も、其の爛熟期から頽唐期を経て遂に跡方もなく崩壊した。然し大羅馬帝國が産みの親となつて、あとに残した子供達は皆健全に育つて行つて文化進展の大なる役割を果した。伏姫の持てる八つの珠數玉から八大士が生れたと同様に、大羅馬の子は一、ガリヤ(佛)二、ゲルマニヤ(獨)三、ブリタニヤ(英)四、エスパニヤ(西・葡)五、イタリヤ(伊)の五人の子供で、その第一の佛は大革命によつて政治的に文化の革新を促がし、第二の獨は宗教改革を遂げ、第三の英は産業革命を成就し、第四の西・葡は東西の新航路發見によつて世界の文化に貢獻し、第五の伊は文運復興によつて近世文化の先驅となつた。か程に優良な子供を産み落した大羅馬は其の文化的諸施設において特に規模雄大なる經綸を遂げて居たものな

る事は敢て疑のない所である。抑々近世の文化が中世の文化の上に築かれ、中世の文化が上世の夫に倣へるものたる以上は、交通文化進展の淵源も亦實にその根ざす所頗る遠きにありと謂はなければならぬ。

今日の通信文化はトキー全盛、ラヂオ短波長時代となり、視覚時代を超越して聽覺時代となつた事は驚くべき跳躍であるが、其の茲に至る迄の間は實に何千年の久しき一に文字によつて通信するの實情であつた。人類が言語を以て己の意思を發表し、更にその意思を傳ふる爲め文字を發明し、文字の發明と共にその文字を記すべき手段方法を講じ始めたは何時の頃なりしや之を的確には定め難いけれども、紀元前千八百年の頃ペピルスの草よりその皮をとりて一種の紙を發明したのが通信進歩の劃時代的の出來事であつた事は多言を要しないのである。今日と雖も當時の書狀帳簿の現存するものによつてエヂプトが文明の施設に於て確かに他の民族に比して勝れてゐたことを認め得るのである。アツシリヤ、バビロニアにも亦文書の授受につき相當の機關があつた様である。よし飛脚と稱するが如き特殊の専門的の職業が存在したかどうか不明であるが、アツシリヤのセミラミス女王の時文書の事をグラムマタと稱し、之が遞送せられたる文書の古き例として一般にみとめられてゐる。而かも埃及に於いては更に文書遞送の方法が秩序的となつてゐて、伯林の遞信博物館所藏の郵便物には其の發着日附と遞送者の名前等を判讀する事の出來るものがある。ユダヤ民族の飛脚は可成進歩して居て、ダビデ・ソロモン等の治下にありては、之に伴ひて道路の修築工事も盛んに行はれた。即ち郵政の發達と路政の發達とが互ひに提携して密接離るべからざるものたるを知る事ができるのである。當時の飛脚は一日二十ユダヤ哩（約二二・五英里に當る）を走るを普通とし、日曜日には一ユダヤ哩を走るのを例とした。之が賃金は一日につき約一シエケル（銀環であつてその價は千八百三十二年のプロシヤの半タラーに該當す）であつたと言ふ。

波斯ではキルス王はメヂヤのアストヤヂヤス王を滅して以來其の國土を擴張し、之に伴つて軍用の爲に通信制度の完備を急いだ。クセノフオン・ヘロドタス等も彼の治下に於ける飛脚の迅速な事を稱揚してゐるのである。キルスの歿後混亂せる國內を治めて之を統一した所のダリウス一世は全領土を二十縣に分ち、各縣に知事を派遣し、大概キルスの舊制を襲ひ、軍用並びに統治上の目的を以て道路を築造し驛傳の制を整へた。當時の驛制度においては騎馬飛脚と脚走飛脚とを併存せしも騎馬を利用する事が盛んであつたと云ふ。規則的の傳馬の制は茲に確立したのである。當時の官吏は人馬繼替徵募の強制權を有して居た。斯くの如きダリウスの驛制も其の實質は未だ全きものと稱し難いのであつたが、遂に大羅馬帝國に至つてその道路施設替馬計畫に細密な注意を拂ふに至つて完璧となるに至つた。唯ローマの驛制は其の施設の目的が主として軍用にあつたが爲め、世間或は之をローマの軍事的施設の一として考へるものもないではない。然れどもローマの驛制が單にローマの軍事的發展のみに寄與したとは斷じ難く、ローマ國運一般の進展を促進せし事の偉大なりしは多言を要しない所である。

新聞に似たる最初の設備を創始したのも矢張りローマ時代であつた。其の設備とは即ちアクタ・デイウルナで、恐らく其の初めは元老院や一般人民の會合の議事録に演説とか法律案等が記入せられて居たに過ぎなかつたであらうが、漸次記載の範圍が擴大されていつて、滿天下の好奇心をそゝり得べき種々様々の事を載せる様になつた。斯くて近代の新聞紙と略同様吏にの任免官異動祭典や競技會の様様、演劇の評判其の他市中の珍しい事柄を報道したものであつた。ケーザルの時に斯う云ふものが始めて出來たが、アウグスツス帝の皇后リヴィアは自己の權勢慾の發揮から次の様な事を思ひついた。其れはアクタ・デイウルナに元老院議員の總ての氏名と、貴族階級から毎朝御機嫌奉仕に來る人々の名前を掲載せしめたので

あつた。ネロ帝の母アグリッピナも矢張同様の事を實行した。斯く新聞が發達し行くのと併行して道路が進歩して行つた。當時中歐を中心として重要軍道網がつくられたから、スイツツルのチューリッヒは伊太利及び獨逸竝にガリア（今日のフランス）の間に於ける極めて重要な交通地點であつた。ローマ人は又ライン河を利用して城塞其の他の防備的施設を加へ、未開人の叛に備ふると同時に、産業交通に利用したから、旅客貨物の運送盛んに行はれ、ケルンが當時極めて重要な集散地となつた。ケルンは紀元前五十年頃既にエブロン族の居住せし所で、其の族を平定する戰に於てローマの軍隊は書狀槍を投げて通信を行つたと云ふ。エブロン族亡ぶやケーザルはガリヤ地方統治代官アグリッパをしてウピア族をケルンに移住せしめ爾來ケルンは著しく發達した。紀元五十年アグリッパは此の地にコロニア・クローヂア・アグリスト・アグリツピネセスと命名した。蓋しクロヂュス帝と其の皇后アグリッピナの名から取つたのである。ケルンから各地に向つて發する主なる道路には所謂黄金哩石とて鍍金の里標石があり、又當時の最も進歩せる通信所たるスペクラエもケルンより發して各道に設けられて居た。斯くてローマ滅亡の後もケルンはフランク帝國の治下にあつて依然本道として重要視せられ、ケルン伊太利間十二日乃至十四日を以て通ずるのを普通とした。斯くて中歐は益々ローマ化されたので、カール大帝は自由民の子女より農奴の子弟に至るまで讀書を奨励したが、總ての書物は皆ラテン語であつた。帝の考ではゲルマニズムは偶像崇拜・野蠻・分裂・渾沌を意味し、ローマニズムはクリスト教・開明有力な中央政府を戴く完備せる秩序を意味して居るとした。他のゲルマニー政治家も亦後者を尊重して之に共鳴した。イエリングの所謂ローマの世界三回征服（武力と法律と宗教とで世界征服をなす）は斯くして成就されたのであつた。

彼の有名なセントベルナルドの嶮・シンプロン峠の如き夙にローマ以前より交通が盛んであつたのであるが、ローマ

人の手に入つてから曩にケルト族が祭つて置いたペンの神詞を廢し其の代りにデュピター神の祠を置いたと云ふ事等に依つて伊瑞間の交通の極めて古くから開け居たるを推知する事が出来るのである。

仰もアルプス山脈は、伊太利と中歐とを隔つる一大障壁であるが、ブレンナーの山道は左まで險峻ならず、又ゼプチマ一峠も多數商人の通行路となつて居て、通商の進歩を促したが、十三世紀に至つてサンゴタルドの道路が開け、加ふるにシンプロンの峠も同時に著しく改修せられた爲め、人文の進歩を促す事頓に活潑となつたのである。近世文化の出現は全く此のおかげと云つても敢へて誣言ではない。

文運復活が全歐に速かに影響したのも、ルツターのローマ參詣も、ゲーテの伊太利旅行も皆之に依つて容易ならしめられ、其の結果偉大なるものを産み出すに至つた。仰もゲーテが何故に特に伊太利を漫遊の目的地として選んだのであらうか。蓋し彼は藝術と風土とが密接離る可からざる關係があるのを知つて、自ら古代藝術に面接しやうとしたのであつた。實に彼を人として又文豪として決定的に完成せしめたのは、此伊太利旅行であつた。彼はミュラーと云ふ假名のもとに、單身バイエルン地方から、チロールを過ぎブレンナー峠にさしかゝつて行つた。途中一人の豎琴弾きが十一才の少女を連れて徒歩して居るのに出逢ひ、之を見兼ねて少女だけを抱き上げて自分の馬車に乗せてやつたと云ふ逸話がある。以て此峠が當時小型の馬車を自由に通じ得る状態にあつた事を知るに足るのである。今や一大障壁には數條の長き隧道が通ぜられ、急行列車が自由に往復するの時代となり、更に航空機關の發達に依つて一層容易なる運輸が營まれ、通信としてはラヂオの驚く可き進歩を見るの時世を現出したけれども、而かも常に吾人は顧みて道路と郵政と新聞との三位一體が其の産みの親である事を固く牢記して其の貢獻の偉大なりし事を追憶するを片時も忘れてはならないと思ふのである。